

---

# 装甲鍛冶師・衛宮

呉璽立児

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

装甲鍛冶師・衛宮

### 【Nコード】

N0307N

### 【作者名】

呉璽立児

### 【あらすじ】

第五回聖杯戦争……その決着後、答えを得たアーチャー・英霊エミヤが呼び出された世界は劔<sup>ツルギ</sup>冑という銘の鎧武者達が戦う世界であった。

この世界に呼ばれた目的が分からぬまま、エミヤは戦いに巻き込まれていく。

## 赤い外套の蝦夷（前書き）

この小説は、F a t e / s t a y   n i g h t   +   装甲悪鬼村正  
のクロスオーバーSSとなります。

二次創作小説が苦手な方、両世界観を壊して欲しくない方は、申し  
訳ありませんがお戻り下さい。

また、本小説は両ゲームの多数のネタバレ、個人解釈を含みます。  
未プレイの方や、プレイ途中の方は、クリア後に読むことをオスス  
メします。

## 赤い外套の蝦夷

体はツルギで出来ている。

血潮は鉄で 心は硝子。

幾たびの戦場を越えて不敗。

ただの一度も敗走はなく、

ただ一度の理解もされない

彼の者はここに独り、ツルギの丘で勝利に酔う

故に、生涯に意味はなく。

その体は、きつとツルギで出来ていた。

「答えは得た。大丈夫だよ遠坂、オレも、これから頑張っていくから。」

それが私の二度目の遠坂との別れだった。

第五回聖杯戦争…… またもや勝者は無く、聖杯の破壊という結末でシナリオは幕を閉じた。

私は英霊としての座に戻る。

だが、私は二度と道を間違える事は無いだろう。幾つもの残飯処理を担わされたとしても折れぬことの無い、剣を今ここで打つこと

にしよう。

F a t e / s t a y   n i g h t   +   装甲悪鬼村正  
クロスオーバーSS

装甲鍛冶師・衛宮

## 第一章・赤い外套の蝦夷

英霊に休息など無かった。

私は再び地に足を着いていた。

「まったく、週休2日制という言葉を知らんのか奴は」

悪態を付くが聞くものはいない。

それにしても、ここは何処であろう。

周りは一面の草原。

何もない……いやそうでも無さそう。視線の先には集落が見える。

「一体、何時の時代だ」

集落は藁屋根の家屋の日本家屋だ。

前にいた世界と比べると大分前の時代に飛ばされたのだろう。

「それにしても、2度も日本に呼ばれるとは……」

何の因果であろうか。

だが、1つ疑問が浮かぶ。

呼び出されたのは、戦いの場では無いということだ。

どちらにしても、何らかの尻拭いをさせられるのは、確定事項だ。

「お若い方そこで何をしておられるのか？」

そう言い、話しかけてきたのは、いかにも農民という中年の男であつた。

「いや、特に何をしていた訳でもないのだが……」

気づけばここにいたと言う言い訳は理解できない、と思いいかにも怪しい人物です、といういい訳をしてしまう。

「ぬ……その肌、その髪、お主蝦夷か……」

エミシ……あまり、聞き覚えの無い言葉が出てくる。

知識としてないわけではない。

坂上田村麻呂……彼のものが、征夷大將軍に任命され東北の蝦夷を討ったということぐらいしか解からない。

それが、何故私に向かって使われているのだろう。

「六波羅の者か？」

単刀直入に農民が聞いてくる。

「いや、そのようなものに属しているつもりは無い」

聞き覚えがない単語が出てきた。

いかにもこう敵意を向けられてしまうと、幾ら真実を言ったところで効果は無いだろう。

「と、とりあえず、一緒に来てもらおうか」

霊体化しても、通常の人間を遙かに上回る身体能力で逃げるのも良いのだが……流にみを任せるのもまた、一驚か。

「解かった。同行させてもらうでしょう」

もしここが何らかの戦いに吞まれるとするのなら、私がいることでこの者達が助かる可能性もあるだろう。

私は農民の後に付いて行き村長の家に向かった。

向かう途中突然背後から殺意が向けられる。そのまま切り込み来るぐらいの勢いだ。

“トレース オン 投影、開始”

自分の貯蔵の中から、慣れ親しんだ剣を取り出し、そのまま相手の剣を受け……

「な……！！」

目の前にいたのは3mほどの大きさの鎧武者だった。  
そして再び驚愕する。

干将莫耶<sup>かんしょうもくげ</sup>が出てこない。

「……動くな」

鎧武者が言う。

首筋に刀を向けられる。

「私は、しない旅者だ。出来ればその刀を下ろしていただきたいのだが……」

「ただの旅人が殺気に気づくものか？」

……

……

無音が場を支配する。

「だが、蝦夷<sup>えみし</sup>の刺客もいないか…… よほど貴様が特殊でなければな  
スツと刀が下ろされる。

今度こそ村長の家に通される。

「刺客でもないと言うのならさっさと去るがいい」

あつという間に解除、霧散してしまった鎧武者を脱いだ武士がそう言った。

「あの鎧は何なのですか？」

自分に相応しくない、丁寧な言葉だと心の中で苦笑する。

「蝦夷の癖に、劔冑<sup>けんきゆう</sup>を知らぬというのか！」

ツルギ……と呼ぶらしい。

瞬間、頭の中でカチリと回線が繋がる。

劔……ツルギ

劔冑……ツルギ

2つのツルギが交叉する。

頭の中を刃音が鳴り響く。

体中に溶鉱が流れる。

熔けた玻璃が心を満たす。

最後に見たものは……結晶だ……  
それは禍々しく、鋭く、無機質だ

そして、何よりも美しかった。



## 赤い外套の蝦夷（後書き）

始めまして、呉璽立児と申します。

今回、初めて投稿する事になった小説は、F a t e / s t a y n  
i g h t + 装甲悪鬼村正のクロスオーバーSSです。

何分、小説初心者な者で至らぬ点が多に多いと思いますが、原作  
様やクロスオーバーSSの先人様に恥ずかしくない物を書きたいと  
思います。

これから徐々に投稿していくので、読んで頂けたら、大変嬉しく思  
います。

また、感想、コメント等をもらえたらこれからの参考にもなります  
し、当方も大変嬉しく思いますのでよろしければ送って下さい。

## エミヤの世界（ツルギ）（前書き）

お待たせしました。 2話目です。

話のペースですが、大体3話以上で村正本編の1話が終わるペースで書いていきたいと思っています。 細切れに投稿という形になってしまいますが、どうかお付き合い下さい。

## エミヤの世界（ツルギ）

空はいつの間にか真紅に染まっていた。

私は、座敷布団に寝かされていた。

近くにはあの武士が私を見張るように鎮座していた。

「目が覚めたか……」

「何が起こったんだ」

「貴様は、話の途中に倒れたのだ。そして、もう逃げる事も出来ない……」

「何？」

家の外の気配を探る。とても平穏とはいえない気が漂っている。

「六波羅が来たのだ」

六波羅……それがこの村の外敵らしい。

「俺は行く。匿っててくれたこの村を危険に会わす訳には行かぬのでな」

武士は立ち上がる。

「貴様が敵だとしたら、寝首を掻いておけば置けば良かったのだがな」

死地に赴く武士はそう言う。

「お前の名前は何という。俺は垣見かけいと言う」

「私は……」

私は本当の名を呼ぶのを躊躇う。

だがその思いはあの戦いで打ち絶った。そう私は紛れもなく。

「私は、エミヤシロウと言う」

「そうか、エミヤ。お前が私の敵にならぬことを祈る」

そう言い残すと垣見は家から出て行った。

「いけない」

「戻って、お武家さん」

「駄目だよ、殺される」

「お武家さん」

村人から口々に上がる、制止の声

それらへ、垣見は一言だけ返した。

「世話になった」

私はそれを遠目から見ていた。

六波羅と呼ばれる軍団は、あの垣見と呼ばれる男と同じ鎧を着ていた……いや、違うアレは鎧なんかではない、アレこそがツルギ。

「トレス オン  
同調、開始」

アレを解析する。

アレの銘は劔冑

………

………

そうか………

理解する。

やはり、この世界来て変わってしまった。

私にとって劔ツルギとは劔冑ツルギなのだ。

霧が晴れた。

自分の世界が見える。

其処には過去に無限数の劔があつた。

だが今はどうだろう。

この世界の理と自分の世界が混ざり合つたであろうか、無数の劔冑が散在していた。

すなわち、私の世界の劔が劔冑へと変換されていた。

垣見は更に進もうとした。

その手を童女が掴んだ。

垣見は黙って娘を見た。

片手を伸ばして、そつと頭を撫でた。

それから、引き止める手をそつと放させた。

童女の瞳が潤む。

振り切るようにして、垣見は前へ進む。

軍部隊から幾人かが、捕らえようと武器を抱えて飛び出そうとした。

だがそれを片手の一振りで遮り、部隊長がただ一人、垣見を迎えて進み出る。

村と軍の中間で二人は向き合った。

「……何のつもりだ？ 鷺沼」

垣見は敵意を隠してそう言う。

「昔の上官に敬意を示しただけです。垣見少佐――元少佐」

鷺沼という男は嫌味をいうように垣見を挑発する。

「……………」

垣見はその様な挑発には乗らない。

「村を見逃すとの事に偽りはなかるうな」

「貴方の身柄を差し出すなら、村の罪は問わない。言ったとおりです」

鷺沼は詰まらなそうに返す。

「ならば良い」

垣見は安心したかのようにいきを漏らす。

「で……？ 貴様、よもや本気で俺と仕合う気が」

今度は垣見が挑発する番だ。

「後ろの味方を恃んだほうが良いのではないか」

鷺沼は自信満々に言を返す。

「何故、そんな必要があります？」

「……………」

「貴方は一騎打ちで敗北を知らないことが自慢でしたな。生憎、そ

のような名誉を抱えたまま地獄へ行かせてはやれません」

劔胄で顔は見えないがこれから言う言葉を前に鷺沼は感情を顕わにした。

「現世へ置いていつて頂く。六波羅に叛いた者の最後には、一片の名誉とて相応しくない」

そう語る鷺沼を前に、垣見は感心する。

「見れば、双輪懸もかなわぬほど母衣ふたわがかりが傷んでいる様子。地上にて太刀打ち仕ろう」

垣見がニツカリと笑う。

「見上げた大言壮語だ、鷺沼。あの青二才が、吹くようになったものよ」

垣見が腰の刀に手を掻ける。

片や入念な整備の元、万全な機能を保っている94式竜騎兵。

片や損傷をそのまま、性能が劣化するままに放置されている90式竜騎兵。

「……貰うのはこちらだ、垣見。その皺首を肴に旨い酒を飲める今宵が、今から楽しみでならぬ」

旧縁持つ二人はそれで対話を切り、共に太刀を抜き放った。

美しい、そう私は思う。

様々な戦いの場を経験してきた私ではあるが、このような刃音がしない戦いは始めてであった。

刹那で終わってしまうからこそ、無音

不動……だが、お互いの視線が刃のようにぶつかりあうような、有音

刹那の戦いを知らぬが、長年の経験が垣見の不利を知らせる不穏な気配を感じたか、村人が「お武家さん」と声を投じた。その声が背を押したのかもしれない。

垣見が動いた……。

一瞬。

「……鷺沼……」

「ふ、ふふ……ふふふ」

決着はついた。

勝者の笑いと、敗者の無念。

「既に先のない身だ。相打ちでも良かろうに、無用の欲をかきおつて」

「ぐぶつ……」

垣見の太刀が、斬り上げることはなく。

鷺沼の一刀は、見事に喉を貫いていた。

この決着は互いの心構えの差であつた。なぜならば、

「俺は相打ちでも良いと、腹をすえていたぞ」

鷺沼はもらす。

この男は解かつていた。垣見の技量を知るからこそ、刹那に喉笛を射抜くことしか考えていなかった。

だが、垣見は勝ちを欲しがった。

「死ぬがいい」

鷺沼は腰刀を抜くや、打ち負かした敵の首を刈り取った。

部隊の一人が、鷺沼に村をどうするかと問うた。

「先刻言った。垣見を差し出せば、村は咎めぬと」

「あの村は、垣見を差し出したかな？」

その言葉に嫌な感じがした。

村人は、垣見を庇った。

垣見は自ら鷺沼の前に出て行つた。

「反逆の芽は刈らねばならぬ」

小さな村の悲劇が始まろうとしていた。

兵士達はまるで狩をするように村人を殺していく。

「っく」

その時私の目に一つの光景が映った。

垣見を引き止めた、童女が無残にも劔胄に切り殺されようという瞬間であつた。

私の体は反応的に動いた。

普通の人間ではありえない速度で童女を死の運命から搔っ攫う。

「何……」

劔胄の武士がその光景に驚嘆する。

「大丈夫か？」

私は彼女に安否を確認する。

彼女は泣いていた。

垣見が死んだ事を。

村人が死んでいく事を。

私は何の為に英霊になった？

私は何の為に聖杯戦争に参加してまで衛宮士郎を殺そうとした？

私は切継の何に憧れたのだ？

正義の味方への、理想……。

私は無言で血に染まった彼女の肩に外套をかけてやる。

「蝦夷か……死ぬがいい」

武士が私に劔胄の刀を振り下ろす。

「I am the bone of my sword.  
（体は、剣でできている。）」

愛刀を取り出そうとする。



体が軋む。

拒否反応を起こす。

辛うじて出た柄を掴む。刀を受け止める。  
だが一瞬で碎け散る。

「ハハハ」

思わず笑いが漏れる。

こんなの初めて剣以外の投影を行った時以来ではないだろうか。  
長年を共にした干将莫耶が見る影も無い。

こんな姿形を見真似て形だけを投影した剣では駄目だ。

今までの考えは考えは捨てねばなるまい。

そう

今の

この体はきつと……

劔冑で出来ているのだから

## エミヤの世界（ツルギ）（後書き）

コメントありがとうございます。

今回のお話は、どうだったでしょうか？ 明日から出かけなくてはいけないので少し突貫作業になってしまい雑前さが目立つかもしれませんが。それに前回から続けて同じような描写が少し多かったかもしれないと若干思います。

今回は、垣井さん vs 鷺沼さんの所をなるべく原作を壊さないように頑張りました。次回はとうとうアレが出てきます。

それにしても、村正の武者同士の戦闘描写は難しいですね、地上シーンも空中も……それに、笑いのシーンも。

そういえば、装甲悪鬼・村正のアンソロジーディスクがでますね。邪念編、すごく楽しみです。

それでは、少し遅くなりますが第3話にて再び太刀打ちしましょう。

妖刀・村正現る。　（前書き）

遅くなりました!!　（汗

とぅとぅ出現する、真打劔冑達。

では、どうぞ!!

妖刀・村正現る。

「なっ」

それは一瞬の出来事であった。

人を切り殺すつもり九〇式竜騎兵の刃は九〇式指揮官機の鋼鉄によって阻まれた。

すかさず、九〇式指揮官機は反撃の機会を与えず九〇式竜騎兵の腹部を切った。

私は九〇式指揮官機を投影し、その刀で六波羅の九〇式竜騎兵を退けた。

村は阿鼻叫喚の状態であった。

狩る者と狩られる者の声がいたるところに響いている。

私は、投影を解いた。

私としてみれば、鎧を投影した割には体の負担が無い。

「劔冑か……」

名は体を現すとは当にこの事であろう。その名の通り劔冑の投影は不思議とこの体に良く馴染んだ。

だが、

この状況をどうする。

とても私の感覚では普通ではない。

この劔冑達が私を現界させた要因なのだろうか。

いや、違う。

この世界にはこのような物などごまんと存在する。

では、何故。

その時、

うたがきこえた。

それは、ここに存在する全ての者に聞こえた。

生と死の選択を己に課す命題として自ら問う

されば嘲笑の喚起する渦に喜劇の幕よいざ上がれ

嵐の夜に吼え立てる犬は愚かな盗賊と果敢に戦う

暖かい巢で親鳥を待つ雛は蛇の腹を寝床に安らぐ

木漏れ日の下で生まれた獅子は幾千の鹿を侵食し

せせらぎを聞く蛙の卵は子供が拾って踏みつぶす

生の意味を信じる者よ道化の真摯な詭弁を聞け

死の恐怖に震える者よ悪魔の仮面は黒塗りの鏡

生命に問いを向けるなら道化と悪魔は匙を持ち

生命を信じ耽溺するなら道化と悪魔は冠を脱ぐ

獣よ踊れ野を馳せよ歌い騒いで猛り駆けめぐれ

いまや如何なる鎖も檻も汝の前には朽ちた土塊

場が一転する。

村人が苦しみ始めた。

いや、村人だけではない。六波羅の兵士も様子がおかしい！

うたがつづく

奇跡を行う聖人は衆生を救い神を呪って嘔吐する

黄金の兜の霸王は万里を征し愛馬と共に川底へ沈む

湖の美姫は国を捨て愛を選び糞尿に溺れて刑死する

弧赤児は蚯蚓の血を母の乳とし三夜して腹より腐る

生命よこの賛歌を聞け笑い疲れた怨嗟を重ねて

生命よこの祈りを聞け怒りおののく喜びを枕に

百年の生は炎と剣の連鎖が幾重にも飾り立てよう

七日の生は闇と静寂に守られ無垢に光輝くだろう

獣よ踊れ野を馳せよ歌い騒いで猛り駆けめぐれ

いまや如何なる鎖も檻も汝の前には朽ちた土塊

幕が引かれた。

六波羅の兵卒が味方の竜騎兵に銃を撃ち始めた。

「な、なにが起こったんだ。」

反乱？

いや違う。この状況はそんな生易しいものではない。

獣だ。

獣同士が互いを殺しあっているのだ。

「歌の所為か……」

自分は英霊という事もあってなんとも無い。

そして、劔冑をまとった六波羅の兵士達も正気のようなうだ。

空で突如爆発が起こった。

空にいた、竜騎兵がまた堕ちた。

「銀色の劔冑？」

九〇式の様な同じデザインではない。この世に唯一つ。芸術品の  
ような美しい劔冑がそこにあった。

生命に問いを向けるなら道化と悪魔は匙を持ち

生命を信じ耽溺するなら道化と悪魔は冠を脱ぐ

生と死の狭間に己を笑い恍惚として自ら忘るる

さすれば夜明けの嘆きを鐘に神曲の幕よいざ上がれ

空中に静止する銀に、六波羅の兵士達が集団で掛かる。

「馬鹿が」

あれは、相手が一騎だから多数で掛ければ何とかなる何という生  
易しい物ではない。

私は見た瞬間に理解する。

見たツルギを解析し、貯蔵する私だからこそアレを理解する。

妖刀・村正

私がいた世界では世界では、あの徳川に仇を成したとされる村正である。

だがこの世界では、剣が劔冑へと姿を変え存在していた。

鬼に逢うては鬼を切る

仏に逢うては仏を切る

数ある劔冑の中でも、村正は違っていた。  
ツルギの理がそこには有った。

束に掛かるうが無意味

銃を撃とうが無意味

明らかにレベルが違う。

村正は、他の劔冑とは格が異なっている。

六波羅の劔冑はすべて同じ形である。それに比べてシャープなデザインの村正はただ一騎。

「そうか」

六波羅のがいわば工場で型に流されて量産された刀だとしたら、あの村正は刀鍛冶が作り出した名刀。

そして、仕手……いわば乗り手も強い。

訓練と言う名の量産された兵士に対して、村正の仕手は当に歴戦の強豪とでも言うべきか

堕ちた兵士は、先ほどまで味方だった兵士に村人に……蟻の巣に落ちた翅を？がれた蜂というモノか、竜騎兵は無残にも喰い散らかされた。

「貴様は一体、何なのだア！！銀の魔王ツツ！！」

残った鷺沼も無残。他の劔冑よりも長く持ったが片手で落とされた。

うたはつづく



さつりくはつづく

「私をここに呼び寄せたのはコレか」  
今までにも英霊として呼び寄せられた原因と言つものは幾つもあった。

人が滅亡の危機に瀕した際に呼ばれる、英霊。  
人を守る為に、人を殺すと言う矛盾。

「だが、私は人を守ると決めた」  
それにしても、何という運命か……。

世界を滅ぼしかねる魔剣というのは幾つも有った。それを貯蔵し、対する聖剣を呼び出したことはある。

だが、世界を滅ぼしかねる日本刀というものに会ったのは初めてである。

自分のルーツとも言える国の妖刀。

これはあの英雄王でなくとも、自分の倫理観とは別に心が踊るものがある。

往こうかと思つた所に、

もう一つの影が現れた。

赤い劔冑。

「あれは……」

村正。

もう一つの村正であつた。同じ理を秘めた劔冑。

私が出す手も無く、銀と赤は交叉する。

初めからそうあるべきものだと言交する。

流星の如く

赤の星は餓狼めいて獰猛に。

銀の星は雌鹿めいて軽やかに。

咆哮が夜空を叩く。

笑声が夜空を渡る。

赤の武人は慟哭の響で太刀を繰り出し、

銀色の武人は抱擁の柔らかささせそれを流す。

美しい。

私はそう感じてしまう。これは殺し合いだそれなのに美しい。

劔冑同士の戦いに。

これまでそのようなことを抱いた事があっただろうかあのブリテンの王でさえ、

紅い槍の使い手でさえ、

すばらしき刀術を極めた武士でさえ、

私の心をかき乱した事は無かった。

「何故」

何故私はここまで心揺れるのか、

何故私は涙を流しているのか、

邪道を極めた私が、何を持って正道に憧れる……。

いや、違う。

私は武人同士の戦いになどこれっぽっちも憧れてなどいない。

ツルギだ。

ツルギ同士の刃音に憧れているのだ。

剣の音が、劔冑の音が、私に教授する。

そう私はただ、武士でも仕手でもなく、一重に刃でありツルギであり、鍛冶士であつた。

気が付けば、赤は地に堕ち

銀は赤を見下ろしていた。

銀は赤の野太刀を手にすると七つに砕いた。

欠片は楕円をしていた。そして空色へと霧散して消えた。

## 妖刀・村正現る。（後書き）

前書きにも書きましたが遅くなり申し訳ありませんでした。それにしても、パソコンの無い環境と言っものがどれほど苦しいかを実感した8月でした。

いかがでしたでしょうか？

これにて、村正のプロローグ部分が終わりました。

これ以降、オリジナルの話を挟みつつ村正の世界にエミヤが乱入していく話を考えています。

これからの話をする、井上真改と村正の話は原作道理で展開させます。エミヤが介入し始めるのは、二章の長坂右京の話からとなります。

実は、次の話は完成しているのですが、オリジナルの話となりますのであまり満足する出来には至っていません。なんとか、次の話を修正して投稿させていただきたいと思います。

皆さんのコメントには毎回感想を頂いて、非常にありがたい思いでいっぱいです。本当にありがとうございます。

では、今回はこの辺で筆を置かせていただきます。

村正・邪念編を非常にやりたい……

## エミヤと劔冑（前書き）

遅くなり、ホントに申し訳ありません……

前回までがプロローグ、今回からが1章という形となっています。

そして、2章……実は半分ぐらい出来ているのですが……こちらは、村正本編の道筋とあった話となっているので、出筆スピードが早かったのですが、いきなり1章でオリジナル路線に入ろうとしてその難しさから断念しかけました。

しかし、2月に村正関係の商品が発売された事もあり、今回短いですか書いた所を上げました。

常々、足りないところもございますがこれからもよろしく願います。

## エミヤと劔冑

――気が付けば、焼け野原にいた。

村は一面の廃墟に変わっていて、とても現実には思えなかった。

獣達はその身を業火に焼かれ、堕ちた劔冑の骸はこちらを睨んでいるようであった。

……その中で、原型を留めているのは自分だけである。

鼻緒が切れた草履を引きずりながら歩く。

皆が狂う中どうして、自分だけが生き残っていたんだろう。

生き残った自分が運が良かったのだろうか。

それとも、自我を無くし痛みも感じずに灰になった皆のほうに運が良かったのだろうか。

どちらかは判らないが、自分だけが生き残った。

生き延びたからには生きなくちゃ、と思った。

自分には大きすぎる大きな外套を抱くように抱えながら歩く。

不思議と外套に覆われている上半身は無傷であった。

だが、下半身はボロボロであった。既に片足は言う事を聞かなくなっていた。

まず、助からない。そう思った。

周りのものと同じように地獄の業火でこの身を焼かれてしまうの  
だろう。

そうして倒れた。

だが、身体は地面に叩きつけられる寸前で止められた。

大きな手だった。

だが、鋼鉄のように硬い皮膚であった。

……その顔に見覚えが有った様な気がする。

ただその人は言った

「生きていて、ありがとう」

力が無い。

この世界に呼ばれて召喚された私には今までどおり戦う事は出来なかった。

この世界では、如何なる宝剣も魔剣も聖剣も存在しない。どんな剣であろうが劔冑の前では意味を成さない。それ故に力を持つ剣は生まれることが無かった。それがこの世界の理である。私の持つ幻想は、この世界の幻想の前には意味を持たないのであるうか？

英霊の力は、呼ばれた世界の認知度に比例する。だが、基本的な戦闘力は保持している……はずである。特に、私の持つ力は無限の剣製。内包世界は外界の影響を受けない。それが外界の影響を受けている以上、私の召喚に何らかの不手際があつた可能性が高い。

だが、すでに召喚されてしまった以上いくら仮説を唱えようが意味が無い。不幸中の幸いといえば、この世界の最大武力が劔冑……ツルギであつたという事であろう。

「そう、私は劔冑を知る必要がある。」

#### 鎌倉

この大和においての實質首都の役割を担う大都市。六波羅が政権を置く故に比較的治安が安定している。だが、どんな安定した土地においても暗部は存在している。

「そう、我々は優れた人種なのだ。むしろ、我らは優遇されるべきである。」

怪しげな集会だと思う。

「我々は、約束を取り付けた。かの聖地に我々の為の国を建国しようではないか。」

だが、藁にもすがる思いで集まつた蝦夷の人々は、そんな怪しげ

な言葉だとしても乗るしかないのだ。

「どう？ 見事なもんつしょ？」

そう話しかけてきたのは、帽子をかぶりメガネをかけた少女である。私をここに招いた当人である。

「何故、私をここに？」

「お兄さんからは、甲鉄の匂いがしたからね。きっと名だたる鍛冶師じゃないかと思ってね。」

スンスンとわざとらしく匂いをかく真似をする。

「きつと、大和にいたんじゃこれからはきつと日の目を浴びる事は無いと思って招待したんだ。」

周りを見ると、どうもまともではない連中ばかりが集まっているように見える。

「残念ながら、私は劔冑を打てるほどの力を持つてはいないよ。」

残念ながらこれは事実である。現状の私では、人刀一体とでも言えはいいのだろうか……劔冑としての強さも、劔冑使いとしての武人の強さも全く足りてはいない。

「そうかい？ でもね……」

少女は言う。

「お兄さんはね、きつと良い鍛冶師になるよ。根拠？ そうだね……」

……お兄さんは劔冑のカミサマに愛されているんだよ。」

その時、私は殺気を感じた。誰からでもない、目の前のこの少女からだ。だが、その気もあつという間に抜ける。

「お兄さん。良い鍛冶師になりたいならね。コイツらに付いて行くといいよ。きつと、いい所につれていってくれるはずだよ。」

そう言うつと、少女はさっさとこの場所から出て行った。

## 子連れ、英霊エミヤ（前書き）

更新が遅くなり申し訳ありません。

オリジナル小説を書くことに手を出した所為で遅くなりました。

ただそのおかげでオリジナル展開が若干上手になった（？）気がします。

タイムライン上では、村正勢は今、雄飛の話を進行中です。



## 子連れ、英霊エミヤ

「鈴！」

私は集会場から離れた先の茶屋で待機させていた少女を呼んだ。彼女は私に向かって手を振る。

鈴は村正によって崩壊させられた村の唯一の生き残りであった。村の惨状は常人であれば目を覆いたくなるモノであった。狂った村人が軍人が互いに殺し合い、食い合い、そして誰も残らなかった。そんな中鈴が生き残った。

それは、私が彼女に聖骸布をかけてやったからではないか。私はそう思っている。

ただ、彼女は記憶を失っていた。4歳ほどの鈴にはあの光景は心を壊してしまうほど強烈であったのであろう。それはそうだ、鈴の両親、知り合い諸共に殺しあったのだ。

惨事の後私は鈴を拾い上げた。身も心も傷ついた鈴に、かつての自分自身を照らし合わせてしまった。まるで自分が切嗣にでもなったような感覚であった。ただ1つ違うのは、彼とは違い私にはまだやる事があるということである。

私は鈴を孤児施設に預けようとも思った。だが、鈴はそれを望まなかった。懐かれてしまったのである。

だが、この先私の行く場所に鈴を連れて行く気にはなれなかった。私は、あの怪しい蝦夷達に同行しようと考えていた。それには、大和人の鈴は目立ちすぎるように思える。

「鈴、私はしばらく出かけようと思うんだが……」

「やだ」

鈴は次に出る言葉を予測したのであろう。顔を横に背けた。

「まったく、キミは……」

私は、ため息をこぼす。このやり取りも幾度となくやり通してきた。だが一向に彼女は顔を縦に振らない。

私とて、鈴を置き去りにしたほうが彼女自身安全なのではないかとも考えた。私が行く道は戦いしか起こらないであろう。だが、置き去りにして誰かが助けてくれるほど、この大和という国は豊かではない。女子が誘拐され身売りされている話などもよく聞く。何故か私は鈴を見捨てられずにいた。

私はこの少女を赤と黒のコントラストな我侬でおっちょこちょいな彼女に重ねてしまっていた。もちろん、彼女との繋がりがの残っている訳ではない。だが彼女を思い出すたびに、目の前の少女・鈴を置いていく気持ちにはなれないのであった。

私が思いにふけっている間に、鈴が瞼をこすり頭を横に揺らす。

「鈴、眠いのか？」

「うーうん。なんともない……」

そうは言うが、体はもはや限界のようであった。

仕方あるまい、この話は今日はここまでであろう。

私は鈴をおぶる。

「さて今日の宿を探さなくては」

背中を感じる、小さな温かみが今の私にはとても心地よかった。

「こ、コレは……作った料理人でてこい！！」

民宿と小料理屋をかねる小さな店。男は料理を一口含むと大声を出す。

「はい、何でしょうか」

私は、怒鳴り声を受けて男の前に顔を出す。幸い客は、この男一人きりであった。

「うまい……うますぎる。ワシはこんな料理を一度も食べた事がない……」

私こと、英霊エミヤはこの店で料理人として雇われていた。

このような経緯にいたったのには理由がある。簡単にいってしまえば、金がなかった。そもそも、眠ることすら必要ない私だが、鈴

の為に野宿を鎌倉に着くまで何度かした。だが、鎌倉で野宿をするにはのは無理があった。警官に見つかれば即刻、職務質問であろう。宿がない、金がない……とくれば、残る手段があるとすればただ1つ。身体を売るしかない……もちろんヤラシイ意味ではない。ツルギを打つ他に私の出来る事があるとすれば食事を作ることだ。

交渉を持ちかけた宿の主人は、最初険しい顔をしていたが厨房を借りて1品料理を作ってみたところ、快い返事を貰う事ができた。今の私は紛れもなく給仕者<sup>サーバント</sup>であった。

「エミヤ君、ウチで働かないかい？　もちろん、住み込みで給料も出そう」

店主は先ほどの客の反応を見て、私にそう持ちかける。

「すまない……私には他にやる事がある」

「そうかい」

店主は実に残念そうであった。

給仕も一通り終えたところで、私はこの先のことを考えなくてはいけない。恐らく、蝦夷の集団は明日にも旅立つのであろう。私はその一同に加わろうと思っていた。だが鈴がいる限り難しいのではないだろうか。

私は、今夜借りる事が出来た部屋に戻る。

「鈴……戻ったぞ」

だが部屋に鈴の姿はなかった。

## 子連れ、英霊エミヤ（後書き）

まだ少しエミヤの単独ルートが続きます。お付き合いください。

オリジナル展開を書く、原作様の偉大さがよく分かります。エミヤを立てつつ村正を殺さないよう（話的に）にする、難しいですね。

そういえば、皆さん妖甲秘聞鋼はお読みに成られましたか？ 私はドラマCDも聞きましたが、こちらはかなり凄かったです。本編で明かされなかったアレについて触れられていて私は非常に感動しました。

上でも宣伝いたしました、オリジナル小説も書いていますもしよろしければご覧下さい。<http://ncode.syosetu.com/n1155s/>

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0307n/>

---

装甲鍛冶師・衛宮

2011年4月7日22時55分発行